

中国語教育における自己表現育成のための カリキュラム・デザイン案

白 燧

Foreign Language Teaching for Cultivation of Self Expression:
Centered on Chinese Language Education Materials and Instruction

Yu BAI

Abstract: In recent years, within a rapidly changing world, foreign language education is undergoing a major paradigm shift. That is, language learners' autonomy and the transmission of information from themselves has been discussed, largely centered in English and Japanese language education. Influenced by English, and Japanese language education, Chinese language education in Japan has been developing since the 1990s, but output focused education using the self expression pedagogic model is lacking in research. This dissertation focuses on teaching materials and methods currently used in Japanese Universities, and how to incorporate self expression training in Chinese language classrooms.

Key Words: Self Expression, Chinese Language Education

要旨: 近年、変化の激しい時代の変遷の中で、外国語教育における大きなパラダイムシフトが起きている。すなわち学習者の自主性や自分から情報を発信していく、自己表現育成型の教育が、多く語られるようになってきた。

本論では、これまでの中国語教育に関する、議論や考察を踏まえ、第二外国語学習者において確実に、そして効率的に自己表現育成を実現させる上で適していると考えられる「自己表現育成のためのカリキュラム・デザイン案」を提案する。対象者は、第二外国語を履修する初級学習者とし、約25人前後のクラスを想定している。また、学習時間と授業形態については、週2コマ、1年60コマ、総計90時間の中国語会話授業を対象とする。

キーワード: 自己表現, 中国語教育

1 自己表現育成のためのカリキュラム・デザインを作成するに至った理由

筆者は、2016年9月から2017年1月にかけて、関西地区、北陸地区、北海道地区の7大学で共通科目として中国語を第二言語学習として学んで中国語学習者513名、中国語文学と中国語学を専攻する初級中国語学習者74名、計587名を対象に分析を行った。その結果、まず、第二外国語学習者のコマ数のほとんどが週に2コマ、あるいは1コマが中心であるにも関わらず、多くの学習者は構造を中心とした授業や総合的な中国語の能力よりも、日常的に使える中国語、将来的に仕事の場面でも使えるような実践的な中国語会話能力を目指していることが分かった。だが、現状では、教育の視点においても、学習の視点においても読み書きに偏った授業が多くみられる。したがって、これまでとは異なる思い切った角度から、学習者のニーズに適した実践的で会話に特化した

教育を実現する方法を検討する必要がある。

次に、中国語の授業が楽しくないと答えた学習者の多くが苦手意識をもっている。それは授業時間が週 1~2 コマという限られた中で、規則的な文法や声調ができなくてはいけないというプレッシャーにその原因がある。この点を踏まえ、学習者が発音や文法の誤用を過剰に意識せずに、自由に自己表現ができるような授業手法を考える必要がある。

第二外中国語学習者にとって興味ある教材の内容としては、自分のことを伝えたり表現したりするのに使える身近な教材、旅行に役立つ会話の多い教材の割合が比較的高い傾向にある。しかし、実際に授業で使われている教材をみると、学習者の日常生活には馴染みの少ないトピックや設定場面が多い。

実際、学習者が学んだことをもとに自己表現を行うためには、その課のトピック（テーマ）に従って、教材中の登場人物を自分自身に置き換えるステップが必要である。自分であればどのように相手に伝え、自己表現をするのか、その点こそが重要である。また、レベルに応じて、自分がテーマに沿って話したいことを考え、それまでに学んだどのような表現を、どのような文法事項や発音で表現すればできるか考える作業が必要である。そして、それを実際に口に出して発信することで、うまく発信できたことと発信できなかったことに気づき、中国語の表現能力を段階的に習得してゆくのである。

2 従来の第二外中国語授業の一般的な流れ

これまで中国語教育では、日中・中日翻訳練習、簡体字の並び替え練習、声調を正しく漢字の上に振る練習、空欄に正しい漢字を入れて埋めるといった練習問題をこなし、それに答えることができれば、1 課分の授業が理解できたと考えられることが多かった。しかし実際には、学習内容をしっかりアウトプットできているか学習者にも判断できず、学んだことを通して自己自身について簡単な中国語で表現できているかさえ分からないということもしばしば見受けられてきた。

また、学習者が中国語を学んだ結果、それぞれができるようになったことを発揮する機会や場、すなわち、努力した結果の成果物となるものほとんど存在しなかった。学習者一人ひとりが努力の結果をクラス全体で共有し、表現するための機会や場を設けることで、学習者中心の授業となり、学習者自身のモチベーションを高めることにもつながるだろう。それはまた、一人ひとりの自信にもつながると考えられる。

本章では、これまで行われてきた第二外中国語学習の弱点を見直し、学習者が単なる機械的な練習だけで授業を終わらさず、そのもう一歩先につながる手法として、「自己表現プロジェクト」と名づけるものを中国語の授業に導入したい。これは、学習者の会話表現の活動を活性化させ、またクラス全体でシェアすることにより、自己表現能力を育成するためのプロジェクトである。

3 「自己表現プロジェクト」のための教材について

(1) 語学学習を行うにしても、授業を行うにしても、また復習をするにしても、教材は中国語学習の大事な要素のひとつである。それぞれの課で学んだトピックごとの語彙や表現を無駄にしないように、また、それらの語彙や表現をしっかりと定着させるため、トピック（テーマ）は 1 課ごとに立てるのではなく、4 課ごとに相互に関連性をもたせて立てるものとする。

(2) 設定場面とトピックは学習者が自分のことに置き換えたときにイメージしやすいように、日本の大学での日常生活や日本の行事を中心に取り入れる。また、調査では旅行や将来の仕事に少しでも中国語を使いたいという希望もみられたため、単なる旅行ではなく、インターンシップ生として中国で働くというストーリーを取り入れる。

(3) 本教材で使用する単語と文法事項については、中国語教育学会が 1 年 90 時間対象の第二外中国語学習者向けに提案しているものを中心に使用しているが、課によって、学習者がより気持ちを様々な視点から表現豊かに表現できるように、中国語教育学会の提案する範囲に入っていない語彙や文法点も使用している場合も多少ある。

3.1 「自己表現プロジェクト」のための教材内容について

本論文が提案する自己表現育成のための「第二外中国語自己表現プロジェクト」は、次のような内容で構成される。教材に登場するのは、主人公の大学1年生の「田中光」、そして学習者自身を表す「あなた」である。この2人の会話内やストーリーを通し、内容を自分に置き換えて「自己表現プロジェクト」を行うことにより、最終的には初歩的な中国語で自分自身を紹介し、自己表現できるようになることを目指す。なお、このプロジェクトについては、全課で6回ほど（「自己表現プロジェクト①～⑥」）設けることとする。

(1) 第1課から第3課は発音に関する内容である。

第1課から第3課にて基本的な中国語の発音の基礎を身につける

(2) 「自己表現プロジェクト①」のための教材内容－第4課から第7課まで

第4課から第7課までを「大学生生活編 part 1」と題し、これまでの中国語の教材のように、学習者が自分自身に置き換えにくい内容ではなく、設定場面とトピックは日本の大学における日常生活とした。教材の中で出てくる会話内容やストーリーにより、初歩的な中国語で自己紹介、家族のこと、好きなこと等に関し、自己表現できるようになることを目指す。表現した内容は録画し、簡体字による字幕もつけさせることで、会話のみならず文字によるアウトプットの力も習得させる。

(3) 「自己表現プロジェクト②」のための教材内容－第8課から第11課まで

第8課から第11課までを「大学生生活編 part 2」と題し、第4課～第7課と同様に場面を日本の大学に設定し、それと関連するトピックを取り上げた。しかし、内容に関しては、単に自己紹介や好きなこと、家族のことだけではない。自分のスケジュールや天気や時間のことなど、さらに表現の内容の幅を広げ、最終的にはパワーポイントを活用して、大学生生活の月曜日から金曜日までのスケジュールの中で好きな時間を語るができるようにする。

(4) 「自己表現プロジェクト③」のための教材内容－第12課から第15課まで

第12課から第15課までは「日本を巡る編 part 1」と題した。これまでの中国語教材は、中国国内の文化や生活を伝えることにページを割くものが多くみられた。しかし、近年各国から日本を訪れる中国語母語話者も日々増えてきている。そのため、日本という国の特色や、注目されているものを通して、中国語で自己表現できることも非常に大事であると考えられる。また、日本のことを相手に伝えるためには、情報を調べることも欠かすことができない。したがって、調べたことを中国語でまとめる作業や、中国語母語話者にインタビューを行い、その内容を自分たちの考えと比較しながらまとめて発表することも行う。これらは、3～4人のグループで行うプロジェクトとする。

(5) 「自己表現プロジェクト④」のための教材内容－第16課から第19課まで

第16課から第19課までは「日本を巡る編 part 2」と題した。日本の新幹線、日本の朝食、日本のアニメーション、日本のスポーツなど、世界の中でも注目される日本の事象について学んでいく。最終的には、第12課から第19課までの内容も含め、初めて日本を訪れる中国語母語話者を想定して、日本について紹介する。そのためにはどのような風物や場所を紹介すべきか、3～4人のグループで考え、ポスター作りを通して自己表現することを目指す。

(6) 「自己表現プロジェクト⑤」のための教材内容－第20課から第23課まで

第20課から第23課までは、「異文化理解編 part 1」と題した。普段の日常生活の中で中国語、中国の人々、そして中国の文化に接することが日々ますます増加している。しかし、そのような環境にいらながらも、中国に対する印象やイメージに関しては、実際の中国とは違う点も多くみられる。そこで、第20課～第23課は、教材中のストーリーに、実際に日本にある中華料理、支払方法の変化、日本にいる中国留学生のアルバイト事情などのトピックを取り入れた。設定場面は日本であるが、トピック内容は中国に関連するものにするので、私たちが、普段の日本の生活の中で抱えている中国のイメージをより実像に近づける課とした。第20課から第23課までの「自己表現プロジェクト異文化理解編 part 2」として、学習者に中国人観光客が日本を訪れた際の旅行スケジュールを考えてもらう。それを文章化した上で自己表現をさせる。さらには、組み立てたスケジュール案を Web 上にアップロードし、クラス全体で閲覧できるようにする。スケジュール案の中で、最も優れた旅行プランを立て

たグループを全員で選出する。

中国人旅行者にお薦めの観光スポットはどこにするのか、旅行中の1日をどのように過ごすのか、どのような食事が好ましいのか。これらのプランを立てる中で、どうすればより日本を楽しんでもらえるのかということを考えることになる。また、相手の視点から物事を考える異文化理解の一步となる。さらには、日本のメリットを自分なりに考えて表現することも貴重な学びである。

(7)「自己表現プロジェクト⑥」のための教材内容第一第24課から第27課まで

多くの第二外中国語学習者は、将来的に多かれ少なかれ中国語が役立つのではないかと考え、授業を履修している。だが、現在多く見られる中国語の教材では、仕事で使う中国語は難しいため、初級学習者には適さないと考える傾向が強い。そこで、第24課～第27課を「異文化理解編 part 2」と題し、初級学習者の多くが大学生であることも考慮に入れ、教材のテーマを中国におけるインターンシップとした。中国にある日系企業で主人公がインターンシップを行うことを通し、また、中国での様々な経験を通し、自分がどのような気持ちや感情を抱いたかを表現させる。第二外中国語学習の1年間の総仕上げとして、自分が中国語を学んで変わった、または成長したと感じる点をスピーチにまとめて発表し、自己表現育成の締めくくりとする。

3.2 実施要件について

目的

本授業は、第二外中国語学習者を対象とした中国語会話授業である。その中でいかにして、学習者の自己表現育成を向上させていくかを目的とする。

対象者

それぞれの課で「自己表現プロジェクト」の発表もあるため、第二外中国語教育学習者、約25人前後のクラスを対象としたもの。

学習時間と授業形態

週2コマ、1年60コマ、90時間の第二外中国語学習者を対象とした中国語会話授業。

注意事項

オリエンテーション時に必ず学習者に話しをする。また、各課の自己表現プロジェクトに至るまでの授業内容も並行して説明する。また、各課の自己表現プロジェクトの内容に合わせて、学生には、それぞれのプロジェクトをこなすための宿題を随時課す。基本的には、それぞれの課の到達目標にある内容を録音し、教師に添付ファイルとして毎回送付する。

それぞれの課における「自己表現プロジェクト」に関する評価基準：

自己表現プロジェクトには、1人で行うものと3～4人のグループで行うものがある。発表者が発表を通し表現したことに関し、A～Gの7つの評価項目について、下記の1～5点で評価する。但し、A～Gの評価基準はあくまでも参考であり、クラス全体では自己表現プロジェクトによって評価基準を足したり減らしたりする可能性がある。それぞれ、発表者が表現したことに関し、次のA～Gの項目に関し、1から5の点数をつける(1. 大変良い 2. 良い 3. 普通 4. あまり良くない 5. 悪い)。

- A. 興味深い発表内容であったか
- B. 大きな声をだして話せていたか
- C. メモを見ずに話せていたか
- D. 発音がきれいか
- E. スピーチをする際、気持ちを込めて話せていたか
- F. 動画がある場合、動画の内容がよいか
- G. 発表内容の構成がよいか

4 「自己表現プロジェクト」の目次について

「学んで、実践して、自己表現できることを体現する実践的な中国語教材」

目次

第1課 発音①
第2課 発音②
第3課 発音③

大学生生活編 part 1

基本的な自己紹介や挨拶を通して自分自身を表現する

設定場面：日本

第4課 実家から大学へ新たな生活
到達目標：自己紹介ができる。挨拶ができる。	
第5課 大学の近くへ引越し
到達目標：家族の人数や年齢についていえる。	
第6課 大学で部活動に参加する
到達目標：自分が好きなことや趣味が中国語で話せる。	
第7課 自己表現プロジェクト①

自己表現プロジェクト①

「中国語でオリジナルの自己紹介のビデオを作成してみよう！」

第4課から第6課の学習内容は、自己表現において欠かせない自己紹介、家族のこと、好きなことなどである。第7課で、中国語でオリジナルの自己紹介のビデオを制作することを通し、自分で初めての中国語による自己表現をやってみよう。

大学生生活編 part 2

設定場面：日本

第8課 大学の窓からみえる四季
到達目標：今の季節、今日の天気について話すことができる。	
第9課 図書館で偶然友達と会う
到達目標：理由を説明できるようになる	
第10課 勉強の時間
到達目標：困った時に協力をお願いすることが表現できる	
第11課 自己表現プロジェクト②

自己表現プロジェクト②

「パワーポイントを使って、中国語で自分のスケジュールを発表してみよう！」

第8課で1年の季節や気候が中国語で言えるようになる。第9課と第10課で曜日や授業、そして試験など大学での自分の時間割やスケジュールについて表現する方法を学ぶ。第10課より、比較の表現を学んでいくことができる。これらの学習を通し、第11課では、大学生活の中の一週間のスケジュールの中で、自分が好きな曜日のスケジュールをパワーポイントで作成し、紹介する。また、パワーポイントの内容は簡体文字で書くため、話すためのアウトプットだけでなく、書くためのアウトプットも鍛えることができる。最終的には、自分のスケジュールに関して自己表現ができるようになることを目標とする。

日本を巡る編 part 1

設定場面：日本

第 12 課 関西圏は広い ……………

到達目標：中国語で関西地区はどんな場所があるか話すことができる

第 13 課 清水寺へ行こう ……………

到達目標：清水寺はどんなところか簡単に紹介できる

第 14 課 奈良公園へ行く ……………

到達目標：奈良公園はどんなところか簡単に紹介できる

第 15 課 自己表現プロジェクト③ ……………

自己表現プロジェクト③

「中国語母語話者に直接インタビューしてみよう！」

第 12 課～第 14 課では、関西圏の良さや、清水寺、奈良など日本の歴史ある場所を設定場面とした会話を通し、どのように紹介するのか学んでいく。第 15 課では、学習した表現を通し、大学にいるに中国人留学生に、日本の好きなもの、好きな場所についてインタビューをしてみよう。そして、その内容をまとめグループで発表をする。

備考：このプロジェクトは 3～4 人で行うことを考えている。学習者同士が中国人留学生にインタビューするという、実践的な共同作業を行っていく中で、それをどのように、発表時に他者に伝えるか、考えることで、自己表現を学ぶことができる。また、質問力、会話によるアウトプット、書くことのアウトプットを鍛えることができるだけでなく、仲間同士で、共同で物事をやり遂げることも大切さも学ぶことができる。

日本を巡る編 part 2

設定場面：日本

第 16 課 新幹線に乗って実家へ帰郷 ……………

到達目標：交通上の利便性を話すことができる。

第 17 課 宮崎駿アニメ展示作品 ……………

到達目標：宮崎駿の作品の中で何が好きか、その理由を簡単に伝えられるようになる。

第 18 課 2018 年ワールドカップで活躍する日本選手 ……………

到達目標：人気のあるスポーツを通して、自分はどのように感じるのか伝えることができる

第 19 課 自己表現プロジェクト④ ……………

自己表現プロジェクト④

「紹介したい日本のことに関するオリジナルポスターを作成しよう！」

第 16 課から第 18 課まで、日本の乗り物、アニメ、スポーツに関して、その特徴を表現することを学んでいく。

第 19 課の自己表現プロジェクト④では、日本を訪れる中国人旅行者に何を、どのようなことに紹介したいのか、なぜそれを紹介しようと思ったのか、ポスター作りを通して自己表現を行う。そして、自分が紹介したいことに関して、知識や情報も必要であるため、ポスターを仕上げる過程の中でリサーチする力も習得できる。

備考：このプロジェクトは 3～4 人で行うことを考えている。学習者同士が実践的な共同作業を通して、ポスター作り通した自己表現を行うことで、会話によるアウトプットを鍛えることができるだけでなく、共同で物事をやり遂げることも学ぶことができる。また、頭の整理ができ、書くことのアウトプット力を鍛えることもできる。どうして自分たちはそれを紹介したいのか、そのメリットも述べる必要があるため、自分たちで十分にリサーチをすることも必要となる。

異文化理解編 part 1

設定場面：日本

第 20 課 中華街の中華料理（上）……………

到達目標：「様々な」という表現を使って会話ができる

第 21 課 中華街の中華料理（下）……………

到達目標：特徴を表現できるようになる

第 22 課 ドラッグストアで通訳のアルバイト ……………

到達目標：時間が経った結果のことを表現できるようになる。

第 23 課 自己表現プロジェクト⑤ ……………

自己表現プロジェクト⑤

「日本を訪れる中国人旅行者に旅行のスケジュールプランを立てよう！」

自己表現プロジェクト⑤は「日本を訪れる中国人旅行者のために旅行プランを立てよう！」というものである。第 20 課から第 22 課までで学んだことを通し、日本を訪れる中国人旅行者のために、あなたがいいと考える一日のスケジュールプランを立て、それを発表することで自己表現を行う。発表後、学習者が考えたスケジュールプランは、インターネットによってクラス全体が閲覧できるようにする。そして、最終的に最も優れたプランを立てた学生を選出する。

異文化理解編 part 2

設定場面：中国

第 24 課 中国航空に乗る ……………

到達目標：初めてのことを経験する気持ちを表現できる

第 25 課 新しい職場での自己紹介 ……………

到達目標：自己紹介を含めた自己アピールを中国語で表現することができる

第 26 課 旅行会社ではじめてのインターンシップ ……………

到達目標：相手に提案することを学ぶ

第 27 課 自己表現プロジェクト⑥ ……………

自己表現プロジェクト⑥

「1年間の中国語学習を振り返って、中国語でスピーチをしてみよう！」

第 24 課から～第 26 課は「異文化理解編 part 2」と題し、設定場面が日常生活の中の日本から中国に切り替えた。主人公は、初めて中国行きの飛行機に乗り、中国でインターンシップを行う。職場で自己紹介をしたり、仕事としてお客様に何かを提案する体験を通し、自分が初めて経験したことに関し、どのような気持ちや考えを抱いたのか、自己表現することを学ぶ。第 27 課では、第二外中国語学習の1年の最後の総仕上げとして、自分が中国語を学んで変わったと感じる点をスピーチで発表し、自己表現できるようになることを目指す。

5 「自己表現プロジェクト」のための序説

本編の「自己表現プロジェクト」の教材は、これまでの日本で出版された中国語の教材には見られなかった形のものであり、学習者の自己表現育成を画期的な方法で提案した。これまでのように、学習者は受動的に授業を受講し、中国語による自己表現を実際に行ったことがないままであることが多い。理屈では、中国語母語話者と多くコミュニケーションと取ること、よく話すことで上達していくことは誰でも分かっているが、どのようにし

て話かけたらいいか分からない。話しかけるのが恥ずかしい、何を話したら良いか分からないなど、様々な考えが頭の中に浮かび、結局のところ躊躇してしまうということが多いためである。

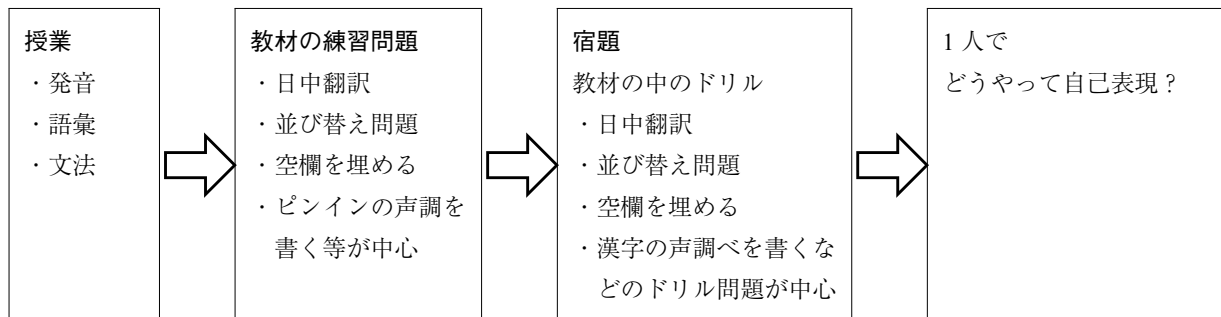
このようにみると、日本の大学における中国語教育の問題点は、教材と授業の両方において、学んだことを通じて実際に表現する場がない点、さらには、そのような現状があまり論じられずにきたという点である。

従来、授業・教材の練習問題・宿題という各要素が、体系的に中国語の学習目標に向かって構成されておらず、それぞれが単独で成り立っていたことも否定できない。したがって、教材を作成するにあたって、次の観点を本プロジェクトに取り入れた。

- (1) 学習者は、実際に自己表現と繋がりがある授業が必要である。
- (2) 授業において、自己表現を練習する、そして実現させる場が必要。
- (3) 授業中だけでなく、宿題にも自己表現の要素を取り入れたものに取り組みさせる。自分ができることとできないことに気づきができ、中国語で表現することを習慣化することにつながる。
- (4) 授業から宿題、そして自己表現へと、学習活動全体に一貫性を持たせることで、着実に自己表現育成の準備ができ、順序にこなしていくことで、学習者自身の自信につながる。
- (5) プレッシャーやストレスを感じないように、クラス全体で活動する。「自己表現プロジェクト」の評価基準は、教師だけでなく、クラスの全員が参加する。こうすることでゲーム感覚が生まれ、学習者が楽しく参加できる気持ちになれる。

本編は、「自己表現プロジェクト」を取り入れた教材が、クラス全体のひとりひとりが楽しく参加でき、中国語による自己表現の力や機会を実現できるように考えられた新しい形の中国語教材である。

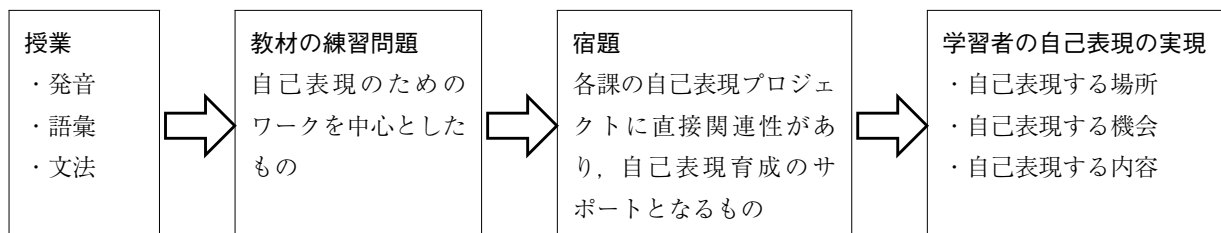
5-1. 従来の学習プロセス



これまでの授業では、教材の練習問題と宿題が同じようなものであることが多い。このような流れでは、授業と宿題の往復のみで、教師側も学習者側も満足しているが、実際に学習者に自己表現させようとしても、学習者がどうしたらいいの分からないため、結局、自己表現が実現せずに終わることがパターン化してしまう。

5-2. 本論文が提案する「自己表現育成」のための学習プロセス

「授業」「練習問題」「宿題」はすべて、学生が自己表現を行うために一貫した関連性をもたせ、自己表現育成を実現させる。



結 論

「教養」から「実用」

今、日本の第二外国語の教育において、学習者が求めるものとは何か。それは、何よりも「使える中国語」、
「将来仕事で活用できる中国語」に他ならない。そもそも新しい言語を学習しようとするとき、このニーズは当然
のことである。その言語を使って、たとえ日常の簡単なレベルであったとしても、まずは会話できるようになる
こと、そして、多様な人々とコミュニケーションを取り、交流できるようになること、そのためにこそ本来、外
国語を学習するのではないだろうか。しかし、日本の教育現場では、まさにこれまでの英語教育がそうであった
ように、この大切なことが実現できていない。

最も大きな問題は、教員が学習者のニーズを十分に汲み取れていないという点である。場合によっては、学生
のニーズに気づけていないということもある。つまり、学習者と教師の間には意識のギャップが存在するのであ
る。あるいは、あくまでも第二外国語の授業であるから、授業を通してできることは限られている、だから授業
の目標は教養としての外国語を習得させればそれで十分だ、と考える教員も非常に多いのではないだろうか。

しかし、筆者が2016年9月から2017年1月にかけ、関西地区、北陸地区、北海道地区の7大学を対象とした
調査でも、明確となった通り、中国の文化や社会といった教養的な興味・関心から中国語を履修している学生の
割合は今や決して高くない。日本の大学の状況は、もはや以前のそれとは異なっている。学生が求めているのは、
やはり「使える」語学なのである。そして、このような状況の背景にあるのは時代の変化である。グローバル化
の進展と同時に、経済面では日本と中国の関係がますます強くなっている。また、近年の爆発的なインバウンド
(アジア、特に中国語圏からの外国人観光客)増加により、日本の街中でも普通に中国語話者と出会う、あるいは
中国語を耳にするのが自然になっている。このような変化の中で、学生の中国語学習に対する動機もより実用的、
実践的なものに大きく変化しつつあると考えられる。

中国語履修者の増加とともに、それと反比例してドイツ語・フランス語の学習者数が激減しているのも同じ理
由ではないだろうか。例えば、かつてドイツ語やフランス語を履修する動機は、文化への興味や憧れであったと
考えられる。だが、現代では時代のニーズは明らかに実用性の高い語学に向かっている。いいかえると、今、「教
養としての語学」から「実用としての語学」への大きな転換が起こっているのである。

自己表現型のカリキュラム・デザイン

以上の考察からすると、自己表現を中心としたアウトプット型の中国語教育は、非常に重要であるとともに当
然のことであるのではないだろうか。今後ますますそのニーズが高まるのではないかと考えられる。中国語教
育に携わる教員は、「教養から実用へ」、「知識から能力へ」の転換にしっかり意識を向け、時代の潮流に応える教
育を行う必要がある。本論においては、この時代のニーズに対するひとつの答えとして、「カリキュラム・デザイ
ン」案を取りまとめた。まだまだ問題点は数多く存在するとは考えているが、第二外国語教育のひとつの申し
い試みとして提案したい。

人はコミュニケーションをするとき、何を語りたのだろうか。それはおそらく、まず自分自身のことではない
だろうか。人は自分について語りたい、自分のことを知ってもらいたいと感じているのではないか。それをき
かけにして、相手のことも知り、興味が広がり、交流の輪が拡大するのではないだろうか。つまり、自己表現は
人間のコミュニケーションの場において非常に重要で、欠かせない要素であり、そこからすべてが始まるとも考
えられる。本論が提案するカリキュラム・デザインにおいても、そのような観点から、自己表現を積み重ねるこ
とにより、やがてはグループやクラス全体でコミュニケーションの輪が広がり、交流が活性化するような構成に
した。今後は、このカリキュラム・デザインがどこまで有効であるのか検証したいと考えている。実際の授業に
適用した上で、問題点を抽出し、完成度を高めたいと考えている。

参考文献

- 荒木晶子「大学生の口語表現能力を伸ばす教育」『月刊言語』37(3) pp.34-41
- 石黒敏明(2013)「外国語教授法の歴史から学ぶーこれからの英語教育で何が必要かー」『神奈川大学心理・教育研究論集』第34号 pp.17-34
- 家根橋伸子(2009)『日本語自己表現活動における「専有化」としての言語学習に関する研究』pp.2~39, pp.40~64
- 和泉伸一(2009)『フォーカス・オン・フォームを取り入れた新しい英語教育』大修館書店 pp.8-16
- 市坂よし子(2002)「自己表現力の育成に関する研究」『岡山県教育センター研究紀要』第230号 pp.1-28
- 岩居弘樹(2014)「Ipadを活用した学生によるビデオ作成」『中国語教育』第12号 pp.38-42
- 植村麻紀子(2013)「21世紀の中国語教育を考えるーグローバル社会を生きる人材を育てるという視点から」『中国語教育』第11号 pp.1-19
- 王松(2013)「中国語学習における教師の指導行動と動機づけ 学習方略との関連:日本人大学生を対象に」『国際学研究』第2巻 第1号 pp.107-114
- 岡崎洋三(2014)「自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチによる自己創作」『多文化社会と留学生交流』(大阪大学国際教育交流センター研究論集)第18号 pp.55-66
- 緒方哲也(2009)「中国語教育におけるコミュニケーション・アプローチの導入について:中国語・中国文学を専攻としない中国語学習者を対象とした実践と報告」『東北大学中国語学文学論集』第14号 pp.77-95
- 郭春貴(2014)「1周2节课の2外汉语教学模式探討ー以广島修道大学为例子ー」『中国語教育』第12号 pp.1-10
- 笠巻知子(2012)「リサーチに基づいた自己表現アプローチ法を使ったコミュニケーション能力向上の試み」『樟蔭学園英語教育センターフォーラム』(1) pp.7-10
- 清原文代(2004)「デジタルで授業を豊かに!ー繰り返し練習:TTSと中国語音声入力、音が出てゲームもできる単語カード Quizletー」『中国語教育』第12号 pp.30-36
- 胡玉華(2008)「コミュニケーション能力の養成を目指した授業づくりー中国語授業における『場面つき学習』の試みー」『中国語教育』第6号 pp.1-16
- 胡玉華(2009)『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』東方書店 pp.26-37
- 胡玉華・馬叢慧(2014)「タスクを取り入れた中国語授業の試み」『中国語教育』第12号 pp.151-167
- 城間真理子(2013)「コミュニケーション力と共同力の育成をめざしてー高校中国語教育での実践報告ー」『中国語教育』第11号 pp.33-45
- 千田香子(2016)「外国語における学習動機:大学初年次の第一・第二外国語学習に焦点を当てて」『言語文化研究』第24号 pp.67-81
- 張軼欧(2012)「第二外国語としての中国語の初級教育に於ける問題と対策」『外国語教育フォーラム』外国語研究センター第6号
- 張宏波(2015)「本学の教学改革と中国語教育の方向性:他大学の先行事例に学びつつ」『明治学院大学教養教育センター紀要』9(1) pp.63-78
- 田邊鉄(2014)「デジタルの導入で授業は変わるかー第11回全国大会ワークショップまとめー」『中国語教育』第12号 pp.12-13
- 白煜(2019)自己表現育成のための外国語教育ー中国語教育における教材と指導法を中心にー」『平成30年関西外国語大学大学院 外国語研究科博士学位論文』pp.97-118